

2012年度 オムニバス講義（ユニット3担当）「地域社会と仏教Ⅰ」

- 報告題目：唐代における中国仏教の転換——辺土から中心へ
- 開催日時：2012年6月22日（金）15:00～16:30
- 場所：龍谷大学大宮学舎北翼204教室
- 報告者：中田美絵（甲南大学非常勤講師）
- ファシリテーター：佐藤智水（龍谷大学文学部教授）
- コメンテーター：倉本尚徳（龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員）
- 参加者：19人

【報告のポイント】

仏教の中国伝来以後、中国の仏僧には、天竺は仏教発祥地かつ中心地であり、中国は仏教世界における辺土であるという意識があった。このような意識は8世紀頃から変化して「仏教教義・經典の発信地」「菩薩の住処」としての中国という認識が発生し、唐の後半期に入ると中国の仏僧が抱いていた辺土意識は薄れてくる。中田美絵氏は、このような辺土意識が払拭される過程で重要な役割を果たしたのが五臺山文殊信仰であると指摘し、とりわけ不空の活動に注目し、文殊菩薩が唐の国土を守護する尊格として位置づけられていく過程を明らかにした。

【報告の概要】

まず報告の導入として、中田氏は五臺山の概要について解説を行った。唐初の五臺山は神仙思想と仏教が併存していたが、則天武後の即位時期に書かれた仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』序文を契機に、次第に五臺山が仏教の聖地として認識されるようになる。7世紀後半の武后期には中国を仏教世界の中心地とするための様々な活動が行われ、その一環としてこの序文が作られたと考えられる。序文では釈迦滅後、文殊菩薩だけが人々を救済する役割を担うとされ、その文殊の住む五臺山を擁する中国こそが釈迦の生まれた天竺に代わる現在の仏法の中心地と位置づけられている。漢訳仏典の中で初めて文殊の住処が中国の五臺山である明記されるのは中宗期で、8世紀初に至って「仏教聖地 五臺山」の存在が明確に位置づけられる。しかし五臺山文殊がより具体的な形で信仰され、広く浸透していくのは代宗期以降である。安史の乱・僕固懷恩の乱などによって国内が乱れた代宗期の唐は、いかにして国内支配を貫徹し、皇帝の権威を回復するかという問題に直面していた。中田氏はそこで唐王朝の支持を得た不空の推進する五臺山文殊信仰が、こうした問題を解決する上で重要な役割を担ったと指摘した。

772年、不空の働きかけにより、代宗の命によって全国の寺院内に文殊院が設置された。更に不空は773年、文殊菩薩と深く関わる經典『大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴經』の翻訳を完成し、これを全国の文殊院に置いた。この經典では、文殊は無量寿如来より優れた浄土を生み出すとされる。当時の唐は長期に亘る反乱により危機的状況にあり、人々は国土が浄

土化されることを強く求めており、不空は皇帝の命令によって設置された文殊院を通じて、文殊信仰を基礎とした大乘国を唐に出現させようとしていた。不空死後、8世紀末から9世紀初に作られた一切経目録『貞元新定釈教目録』では、五臺山文殊は「大唐の保護神」として位置づけられている。つまり、五臺山文殊の存在を通じて唐は大乘国となり、文殊は唐皇帝とその統治する国土・人民を守護する尊格とされたと中田氏は述べた。

最後に、中田氏は中国における辺土意識の変化を仏舎利信仰との関係から述べた。中国の皇帝は自身を阿育王（あるいは転輪聖王）に擬えて塔を建設する例が見られるが、これは天竺の模倣であり、そこには「中国は辺土である」という意識がある。つまり、辺土意識と不可分の仏舎利信仰による皇帝の権威付けは、中華世界の頂点に君臨する中国皇帝からすれば相容れないものである。しかし中国の五臺山を住处とする文殊は、釈迦に代わる唯一の存在として衆生を救済し唐土を守護している。唐を釈迦入滅後の仏法の中心地とすることで、中国仏教徒が抱いていた辺土意識は払拭され、更には仏法の中心地たる中国において仏教を保護する唐皇帝は、転輪聖王として仏教世界にも君臨することができたと中田氏は指摘した。

また唐滅亡後、唐の後継王朝と主張する五代の沙陀政権（後唐）は、仏教聖地としてのみならず「唐」のシンボルとしての五臺山を受容している。更に、日本を含むユーラシア東部の各地域において様々な形で五臺山の移植が始まる。中田氏は、このような地域における五臺山信仰の広がりがあるどのような意味を持っているのかという点については、今後の課題としたいと述べた。

以上、本報告は五臺山文殊信仰を通して中国の仏教徒が辺土意識を払拭し、やがて文殊が唐土を守護する尊格として受容されていく様子を明らかにするものであり、五臺山文殊信仰の広がりから中国周辺諸国への仏教伝播の様相を考察するための一助となるものであった。

【議論の概要】

倉本尚徳氏は、北朝造像銘の中には「辺地衆生」という語句が多く確認できるが、唐代の龍門石窟の銘文などを見ると「辺地」という語がほとんど見当たらないことから、唐代において辺土意識が薄れていた様子が確認できると述べた。また、不空は密教僧というイメージが強いが密教の教理体系の中で文殊信仰はどのように位置づけられているのか、唐では仏舎利信仰と文殊信仰の位置づけはどうなっているのかという質問を行った。前者に対して中田氏は、文殊の姿自体は密教化しているが教理上の詳細は分からないと述べ、後者に対しては、唐後半期仏舎利信仰には密教的な要素が現れてくるので、空海の影響なども加味して考えていく必要があると答えた。

また倉本氏は、唐代に文殊信仰が五臺山という具体的な地域に結びつくのはなぜかと述べた。更に田林啓氏は唐初の五臺山は神仙思想とも結びついていたが、文殊自体が神仏習合的な要素が元々あったのではないかと質問を行った。中田氏は、天竺ではなく中国に聖地を作るという動きがあったことは確かであるが、なぜ五臺山なのか、また神仙思想ではなくなぜ文殊を取り上げたのかという点はよく分からないと答えた。



佐藤智水氏は、『入唐求法巡礼行記』には円仁が五臺山を訪れた時、出会う人が皆、文殊の化身に思えたと記されていることから、文殊菩薩は五臺山に住し、訪れる人によって姿を変えて現れるという認識が、少なくとも円仁のような外国人の中にも広がっていたと述べた。また佐藤氏は、不空が『大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴經』を訳す際に、彼自身

の解釈を加えたのかと質問をした。中田氏は、例えば不空訳の一つ前の實叉難陀訳にも「文殊の浄土は優れている」という語が確認できるため、不空が特別に工夫した部分はほとんどないと考えられ、この経典を選択したというところに不空の独自性があると答えた。

フロアからは、①不空が推進した文殊信仰に対して皇帝自身は積極的に関わっていたのか、②文殊信仰は中央政府の中だけで広まっていたのか、あるいは民衆にも広がったのか、③不空が五臺山と文殊の関係を強調したとき、民衆の反応はあったのかという質問がなされた。①に対して中田氏は、史料を見る限り代宗が積極的に五臺山に関わっているようには見えず、むしろ不空やその周辺や当時政治権力を握っていた宮中の人々が後押しをし、代宗はそれをうまく利用していた様子は看取できるが、代宗からの働きかけについてはよく分からないと答えた。②に対して中田氏は、唐後半期になると皇帝の支配が全国に及んでいるとはいえず、不空が目指した大乘国の出現はある意味理想論であったと述べた。皇帝の影響力が直接及ぶ長安地域や山西省はこういう信仰がうまく浸透したが、中国全土で文殊信仰の遺跡が見つまっているわけではない。結局、皇帝権力の回復については支配者側が自己認識する程度であり、全国に広がるほどの権威回復はなかったのではないかと中田氏は答えた。③に対しては、民衆の反応を示す史料を見つけることはできず、文殊信仰が全国に広まって民衆が幸福になると受けとめたことを確認できる史料はないと答えた。



2012年度 オムニバス講義（ユニット3担当）「地域社会と仏教Ⅱ」

- 報告題目：行基と大野寺土塔——土塔は南伝仏教の遺産か
- 開催日時：2012年10月12日（金）15:00～16:30
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
- 報告者：泉森 皎（元奈良県立橿原考古学研究所附属博物館長・龍谷大学講師）
- ファシリテーター：中川 修（龍谷大学文学部教授）
- コメンテーター：浦西 勉（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：45人

【報告のポイント】

大阪府堺市にある大野寺土塔は、土盛りの方錐形塔であり、日本で多く見られる木造の多重塔とは造形的に一線を画すものである。大野寺は行基四十九院の一つであり、『行基年譜』によると神亀4年（727）に建築が始まったとされる。1993年に行われた大野寺の範囲調査、更に1998年に行われた土塔の整備に伴う調査によって、土塔の特徴について様々な点が明らかにされた。

泉森皎氏は以上のような大野寺土塔の発掘調査成果を踏まえながら、土塔の築造に関わった人々などを通じた地域的特徴と土塔のルーツについて、実見に基づいて報告を行った。

【報告の概要】

報告の導入として、泉森氏は大野寺土塔を取り巻く周辺状況を、自身の経験を交えながら述べた。大野寺土塔は元々瓦葺きであったと考えられ、実際に人名や年号が刻まれた瓦が発見されている。そこに刻まれた人名を整理すると、土塔周辺の渡来系氏族の名が多く確認できる。つまり、土塔は渡来系氏族の協力によって建築されたため、塔としては珍しい「方形土塔」という形態になったのではないかと泉森氏は指摘した。

次に泉森氏は、土塔の建築技術について、国内の類似例を提示しながら解説した。土塔で発見された軒先（瓦当）の文様は土師廃寺の瓦と類似しており、土塔の造成に土師氏に関わった可能性が示唆される。土塔の安定勾配を算出してみると、箸墓古墳や仁徳陵など土塔周辺の古墳の数値と共通している。古墳と土塔の築造年代には大きな開きがあるものの、建築技術を継承している土師氏などがそれぞれの建築に関わったと想定することができる。一方、奈良東大寺南大門の南にある頭塔の安定勾配は、飛鳥の高松塚古墳・キトラ古墳・丸小山古墳などの終末期古墳の数値と類似している。古墳と頭塔では版築など技術の違いはあるものの、安定勾配の数値が一致していることから、土師氏とは異なる技術者達が飛鳥の終末期古墳の築造に関わり、その技術の継承者が頭塔の建築に関わったと考えられる。また、岡山県の熊山遺跡は石積みの方形塔であるが、円筒形陶器が発見されている。これは、塔の頂上部に設置された相輪に該当すると考えられ、それを陶磁器で作成している点に地域の特徴が垣間見られる。以上のような例から、塔の建築に関しては地元の技術者が関わり、地域に即した塔が建築されたと考えられると泉森氏は述べた。発掘調査から、大野寺土塔の頂上部は円形か八角形に基礎固めがなされ、何らかの構造物が存在したと考えられる。また頂上部の下からは、凝灰岩を加工した破片が発見されており、舍利をおさめた箱ではないかという説がある。泉森氏は、行基の骨を分骨した可能性を指摘した。

最後に、泉森氏は大野寺土塔のような方形土塔のルーツについて、南伝仏教の影響を想定した。そこで、インドネシアのボロブドゥール遺跡など東南アジアの塔との類似性について、写真を提示しながら述べた。このような方錐形の塔については、俱舎論に見られる須弥山を中心とする世界を地上に表現するという意図を反映したものと考えられる。これを日本的に表現したものが大野寺土塔なのではないかと泉森氏は指摘した。

以上、本報告は行基の業績と彼が建築した大野寺土塔の造形を通して、日本古代における僧侶と地域社会の関係の一端を明らかにし、更には日本への仏教伝来の様相を考察するための一助となるものであった。

【議論の概要】

浦西勉氏は、従来の行基研究は二葉憲香・井上薫両氏などのように、文献を中心に行基の実像を復元しようとするものが主流だったが、本報告は「考古学の発掘成果を生かした行基研究」という新たな行基研究の方向性を示したと述べた上で、以下のような点を指摘した。

『行基菩薩行状絵伝』には「大野寺土塔」という名称は確認できず、ここに描かれた土塔が今日の大野寺土塔と同一のものなのかどうか、また「大野寺の土塔」という名称がいつから使用されているのかという点については検討の余地がある。また「大野寺」という寺院名が初めて現れるのは『行基年譜』であるが、これは行基の死後、400年以上経過してから記されたものであり、ここにも「土塔」という語は確認できない。このような点については、今後、考古学の発掘成果と文献との比較検討を行う必要があると浦西氏は述べた。

また浦西氏は、大野寺の土塔の形態に南伝仏教の影響が見られるという点に関して、他にも中国の磚塔やあるいは韓国の影響を指摘する論もあると指摘した。行基の師である道昭は、中国に渡って玄奘に学んだ人物である。道昭の影響が行基の土木事業に影響を与えていると考えるならば、やはり中国の影響を考慮すべきであろう。ともあれ、行基の実情にアプローチする上で、四十九院の



発掘なども視野に入れながら、今後は考古学的な成果を生かした行基研究がなされるべきであり、同時に文献的研究と比較検討しながら進めていく必要があるのではないかと浦西氏は指摘した。

佐藤智水氏は、そもそも南伝仏教の伝来ルートについては、文献ではあまり確認できず、更に遺物としてもそれを明確に繋いで説明することが難しいと述べた。また浦西氏の指摘にあった中国の磚塔について、少なくとも南北朝時代にはこの種の方形石段積み塔は確認できず、隋唐時代以降の例などを見ながら、どのような地域で作られたものなのか検証していかなければならないと述べた。

